明朝末期の中国人キリスト者の政治的参与に関する考察
―徐光啓と万暦帝・泰昌帝・天啓帝・崇禎帝の交わりを中心に―

Discussion of Political Participation of Chinese Christians in the Late Ming Dynasty:
Focus on Associations between Xu Guangqi and Emperors Wanli, Taichang, Tianqi, and Chongzhen

何 懿亭
He Yiting

キーワード
徐光啓、皇帝との交わり、政治的参与、キリスト教の展開

KEY WORDS
Xu Guangqi, Association with the emperor, Political participation, Development of Christianity

要旨
明朝末期の中国の知識人、徐光啓はキリスト教に傾倒し、改宗後に科挙試験に合格して朝廷に出仕した。彼は、万暦帝、泰昌帝、天啓帝、崇禎帝に相次いで仕え、これらの皇帝との交わりを通して政治に参与していった。本研究ではまず、徐光啓に関する先行研究を紹介する。次に、徐光啓と上述の4人の皇帝との交わりを明らかにし、この交わりを中心に、徐がどのように政治に参与していったかを考察する。さらにその政治的参与から、明朝末期のキリスト教の展開への徐光啓の貢献について検討を加える。

SUMMARY

Xu Guangqi, a Christian intellectual who lived in the late Ming Dynasty, passed the Imperial Examination after his conversion and served at the Imperial Court, successively serving the Emperors Wanli, Taichang, Tianqi, and Chongzhen. He not only associated with them but also participated in politics. Based on this history, the current report first introduces previous studies. Next, it reveals the relationship between Xu Guangqi and these four emperors of his time. Then, focusing on these associations, we consider how Xu Guangqi participated in politics. Furthermore, from his political participation, the contribution of Xu Guangqi to the development of Christianity in China at the end of the Ming Dynasty is examined.

1. はじめに

明朝末期に生きた知識人、徐光啓（1562–1633）は、1603年に改宗してキリスト者となった[1]。彼は、その1年後に科挙試験に合格して官途に就き、1633年に死去するまで朝廷に出仕した。この期間は、万暦帝（朱翊鈞，1563–1620, 在位：1572.7–1620.8）、泰昌帝（朱常洛，1582–1620，在位：1620.8–9）、天啓帝（朱由校，1605–1627，在位：1620.10–1627.9）、および崇禎帝（朱由検，1611–1644，在位：1627.10–1644.4）の治世に当たり、徐はこの4人の皇帝に仕えながら、積極的に政治に参与していった。例えば、徐光啓は官途の中で、軍隊訓練と暦法修正の職務に任じられたことがあるが、その際、徐は皇帝への上奏書において、軍隊訓練や暦法修正などに関する提案だけではなく、キリスト教改宗者として、キリスト教の弁護、および西洋の知識を導入して応用することも併せて献言した[2]。このように徐は、政治的参与を通じて、中国におけるキリスト教の発展と西洋学問の伝播に力を尽くしていった。

本稿は最初に、これまでの徐光啓に関する先行研究を紹介する。次に、徐光啓と上述の4人の皇帝の交わりを明らかにし、彼と万暦帝、泰昌帝、天啓帝、崇禎帝の間の君臣関係の成立を確認する。さらに、徐と皇帝の交わりに基づき、宗教（キリスト教の弁護）、軍事学（明朝末期の軍事）、天文学（暦法の修正）の側面から彼の政治的参与を考察する。最後に、政治的参与を通して徐光啓が明朝末期のキリスト教伝道にもたらした貢献の3つの側面（キリスト教の新たな認識の提供、西洋学問の導入、イエズス会宣教師と中国人キリスト者の朝廷進出）について論述する。これらの分析によって、明朝末期のキリスト者が朝廷に進出し、政治への参与を深めていったことによる、中国におけるキリスト教の発展への貢献を究明する。

2. 先行研究

これまでの徐光啓研究として、3種類の先行研究を挙げることができる。徐光啓の生涯、彼の人脈（ネットワーク）、および中国キリスト教の展開への徐の貢献に関するものである。

まず、徐光啓の生涯を述べ、1604年から1633年までの徐の官途を記載した伝記が多く残されている。例えば、徐光啓の息子の徐驥（1582-1646）によって書かれた『文定公行実』は最も古い徐光啓の伝記であり、徐光啓が科挙試験に受験して合格し、朝廷に出仕していた経験を詳しく述べている[3]。そして、明朝末期と清朝初期に生きた学者である査継佐（1601-1676）の『罪惟録』、および清朝の朝廷が編纂した『明史』には徐光啓伝があり、徐の生涯を紹介しながら、彼の官途についても記載されている[4]。また、台湾カトリック教会大司教である羅光（1911-2004）の『徐光啓伝』は、徐の宗教的経験とキリスト教信仰を中心とする伝記であるが、徐の官途も第四章から第二十一章までに簡単に言及されている[5]。一方、中国の書誌学者の王重民（1903-1975）によって書かれ、科学者としての徐光啓の生涯を紹介した『徐光啓』は、自然科学の領域における徐の貢献に注目しているものであるが、第三章から第六章では、徐の官途も論じられている[6]。そのほか、徐光啓が朝廷に出仕していた間の彼の経験を採録した年譜もある。例えば、徐光啓の第11世孫の徐允希（19世紀前半－20世紀前半頃）と聖職者の李杕（1840-1911）の『徐文定公年譜』は、年代順で徐光啓に関する記事（官途を含む）を簡略的に挙げている[7]。これに対して、中国の農業史学者と図書館学者の梁家勉（1908-1992）が編纂した『徐光啓年譜』は、徐本人の記事のみならず、徐の生前と死後に起こった徐光啓に関連する記事も収録し、徐に関する各種の出来事を時期ごとに詳細に挙げており、彼の出仕記録が十分に記録されていると言える[8]。

次に、徐光啓の人脈に関するいくつかの文献が挙げられる。例えば、賈雪飛の『明中後期的上海士人與地方社会 ── 徐光啓的成長大舞台』の第三章は徐光啓の姻戚関係を論じ[9]、史習隽の「徐光啓の親族関係と上海地域における天主教受容」の第一章と第二章はそれぞれ、徐光啓の家族と姻戚における男性と女性のキリスト者を論じている[10]。張中鵬と湯開建の「徐光啓與利瑪竇之交遊及影響」の第一章は、徐光啓がイエズス会宣教師マテオ・リッチ（1552-1610）と交流していた経験を詳細に紹介している[11]。また、史習隽の「徐光啓的官界人際網絡與在華耶穌会士伝教事業的展開」の第一章から第四章までの内容、および「明末江南士大夫の天主教受容について ── 徐光啓の交友関係を中心として ──」の第一章と第二章は、それぞれ徐光啓とイエズス会宣教師や他の知識人の交わりに注目し、彼と明朝末期の中国に滞在していたイエズス会宣教師フランチェスコ・サンビアシ（1582-1649）、アルフォンソ・ヴァニョニ

(1566-1640)、ジュリオ・アレニ（1582-1649)、フランチェスコ・ブランカーティ(1607-1671)、および知識人の李之藻（1565-1630)、楊廷筠（1557-1627)、許楽善(1548-1627)、瞿汝夔（1549-17世紀前半頃）の交わりを考察したものである[12]。

最後に、中国におけるキリスト教の展開への徐光啓の貢献に注目している資料がある。例えば、徐光啓の第12世孫と聖職者の徐宗沢（1886-1947）によって書かれた『中国天主教伝教史概論』の第十一章には、徐光啓が上海の布教拠点の成立に力を尽くし、中国滞在中の宣教師に布教に関する意見を提供したことの記載があり[13]、史習隽の『信仰的力量 ── 従徐光啓的交友及家族網絡看其宗教信仰』の第五章は徐光啓本人およびその後裔が上海におけるキリスト教の展開に貢献したことを論じている[14]。そして、孫政清の「徐光啓・科学・天主教（続)」は、徐光啓がマテオ・リッチの宗教書『二十五言』の跋文を作成し、フランチェスコ・サンビアシと協力してキリスト教における魂の概念を紹介した『霊言蠡勺』を編纂し、キリスト教の教義を論じた『答郷人書』を書いたことなどを通して、中国語によるキリスト教思想の伝播への徐の貢献を考察している[15]。また、伍玉西は『明清之際天主教書籍伝教研究（1552-1773)』の第五章で、徐光啓がキリスト教に関する小文章と書籍、序文と跋文を作成したのは、イエズス会の中国布教への好意を示し、宣教師を支援しながら積極的にキリスト教の布教に参与していたことの現われであると論考している[16]。

一方、上述の各種の先行研究にはいくつかの問題点が存在している。まず、これまでの徐光啓の人脈についての先行研究は、徐本人とイエズス会宣教師、他の知識人、および家族成員と姻戚の交わりに限られるため、彼と皇帝の交わりに関する考察が欠落している。これによって、徐光啓研究においては徐の官途と政治的活動は紹介されているが、徐と皇帝との君臣関係から、彼の政治的参与が考察されたことはほとんどない。また、明朝末期のキリスト教の展開における徐光啓の貢献を論じる文献は多く残されているが、これらの先行研究は徐本人の宗教的経験、および徐の宗教的著作に基づき、彼が中国のキリスト教伝道に果たした貢献を考察したため、官職任命の記録や上奏書などの、徐の政治的参与が窺われるものからのキリスト教伝道への貢献が論じられたものは見当たらない。

以上の問題点に対して、本研究はまず、徐光啓と万暦帝、泰昌帝、天啓帝、崇禎帝の交わりの考察を試み、徐の人脈の研究不足を補完すると同時に、君臣関係という新たな視点を通じて徐の政治的参与を再考察する。次に、徐光啓の出仕記録を参照し、彼の上奏書を精査する手法で、明朝末期のキリスト教伝道において徐光啓が果たした貢献の再考察を試みる。

3. 徐光啓と万暦帝、泰昌帝、天啓帝、崇禎帝の交わり

1604年に科挙試験に合格した時点から、1633年に死去するまで、徐光啓は29年にわたって明朝末期の朝廷に出仕し、万暦帝、泰昌帝、天啓帝、崇禎帝に仕えて彼らとの君臣関係を作った。本章では、徐光啓がこれらの4人の皇帝に仕えた期間を3つに分けて論述する。すなわち、(1) 万暦帝、(2) 泰昌帝と天啓帝（泰昌帝の治世は短いので泰昌帝と天啓帝の在位期間を併せた)、(3) 崇禎帝に分けて、それぞれの治世中における皇帝と徐光啓の関係や出来事を考察していく。

3-1. 万暦帝との交わり

1604年に科挙試験に合格してから[17]、1620年8月に万暦帝が亡くなる時点までの万暦帝との交わりは、2つの段階に分けられる。すなわち、進士（科挙試験の殿試で選ばれた登第者）を取得した後、徐光啓はまず翰林院に入って庶吉士（翰林院で勉強する短期間の職位。現在の大学の研究生に相当する）となったが[18]、この時期の彼の主要な活動は、翰林院での課程を履修し、儒教や政治、および文学に関する文章と詩を作りながら（翰林院庶吉士を担当している期間、徐光啓の文章の一部はのちに翰林院の授業用テキストとして、『甲辰翰林館課』に収録された。また、この時期に作られた徐の文章の中で、食糧を輸送する水路（漕河）の諸問題と河川の整備を論じた『漕河議』、および満州とモンゴルの部族の侵入を論じた『選練論』など、徐光啓の政治的関心を示したものがある)[19]、宣教師と交わって数学や天文学などの西洋学問を学び、これらを中国語に翻訳して明朝の社会に導入しようとしたことである（例えば、徐光啓は1606年からイエズス会宣教師マテオ・リッチに協力し、ユークリッドの『原論』を中国語に訳し、1年後に『幾何原本』を出版した)[20]。1607年4月、徐光啓は翰林院検討（文書や勅令などの編纂や校正を担当する低級官職。品位は従七品）に叙されたが[21]、その一ヶ月後に父が病死したため、徐は故郷の上海に戻って3年間の喪に服し、そこでキリスト教の発展と農学研究に注目していた（例えば、キリスト教を上海で普及させるため、徐光啓はイエズス会宣教師ラッザロ・カッターネオ（1560-1640）とともに当地での布教に貢献した。このため上海では1608年以降キリスト教が普及し、改宗者が増え、1610年には200人程度に達した)[22]。また、1610年12月に復職してから[23]、1613年10月に病気休暇をとるまで、徐光啓は約3年にわたって翰林院に留まっていたが、この間、司礼監書堂（宦官の教育を担当する塾）の教員や科挙試験の試験官などの臨時の職務を任された（徐光啓は1611年に司礼監書堂の教員として活動し、宦官に読み書きを教えていた。そして2年後、彼は会試の試験官として派遣された)[24]。それゆえ、徐は官途の最初の9年間にわたって、皇帝に官職や職務を任命されたこと

はあったが、主要な活動は、翰林院での履修、宣教師との交わり、故郷での布教などに限定されていた。また、喪中や休暇によって、朝廷を離れた期間も含まれるため、1604年から1613年までは徐と万暦帝との交わりは少なかったと言える。

一方、1616年7月再度復職して以降[25]、徐光啓と万暦帝の交わりは多くなっていった。例えば、『辨学章疏』などの上奏書を通じての交わりである。キリスト教を嫌悪していた南京礼部侍郎（南京六部の礼部の次官）の沈権（16世紀頃－1624）は、1616年に南京教案というイエズス会宣教師と中国人キリスト者を迫害した事件を引き起こし、万暦帝に上奏書を出し、中国に滞在していた宣教師を批判し、彼らを処罰してキリスト教を禁止することを主張した[26]。これに対し、徐光啓は上奏書『辨学章疏』を書き、万暦帝に対してキリスト教を弁護する護教者の立場を示した[27]。また、徐は1619年10月に詹事府少詹事（皇太子を補佐する官職。品位は正四品）と河南道監察御史（河南地域の政務を監察する官職。品位は正七品）に任ぜられ、来年4月に通州と昌平に赴き、当地の民兵の訓練の担当者となった[28]。そこで、徐光啓は軍隊に関する上奏書を多く作成し、明朝の軍隊の諸問題、および軍隊訓練についての提案などを万暦帝に紹介した。これによって、1616年から1620年までの4年間において、徐光啓はキリスト教と軍事に関する上奏書の提出を通して、万暦帝との交わりを増やした。また、徐が軍隊訓練の責任者に任命されたことから、彼が皇帝からの信頼を得たことがわかる。

3-2. 泰昌帝・天啓帝との交わり

1620年8月に万暦帝が死去した後、徐光啓は泰昌帝と天啓帝に仕え、皇帝との交わりを継続していた。すなわち、泰昌帝の在位期間において、徐は通州と昌平における民兵の訓練を続けて担当していたため、軍隊訓練の進展や軍事に関する見方などを書いた上奏書を皇帝に提出し続けた。しかし、泰昌帝が即位の1ヶ月後に急死したため、徐光啓と泰昌帝の交わりは長くは続かなかった。

天啓帝が1620年10月に即位した後も徐は朝廷に出仕し続け、皇帝に対して軍隊訓練や西洋の鉄砲の購入などを上奏書で提案していたが、この期間の徐の官途は順調とは言えない。体調の悪化のため、徐光啓は1621年3月と11月に2回の休職を余儀なくされている[29]。また、休暇で朝廷に離れていた間、天啓帝の治世中に大きな権勢を持っていた閹党（宦官の魏忠賢とその支持者からなる政治団体）との対立が深まり[30]、徐光啓はついに1625年6月に免職されて上海に戻った[31]。それゆえ、徐光啓は天啓帝の即位後にも上奏書を書き続けてはいたが、病気休暇や閹党からの迫害によって、皇帝との交わりは天啓帝の在位期間の最初の1年間のみに集中している。

3-3. 崇禎帝との交わり

泰昌帝と天啓帝の治世中、徐光啓とこの2人の皇帝との交わりは短かったが、崇禎帝の在位期間には徐と皇帝の間に頻繁な交わりが見られる。天啓帝が1627年9月に亡くなった後、この年に即位した崇禎帝は閹党を朝廷から一掃した[32]。徐光啓は1628年1月に礼部右侍郎（北京六部の礼部の次官で、礼儀や教育などを司る官職。品位は正三品）と詹事府詹事（皇太子を補佐する高級官職。品位は正三品）に任命されて北京に戻り[33]、同年8月に日講官に、9月には経筵講官（日講官と同様に、儒教の経典や歴史などを皇帝に教える職位）に任ぜられた[34]。さらに1629年以降、徐は相次いでに熹宗実録の編纂者と太子賓客（皇太子を補佐する高級官職。品位は正三品）[35]、および礼部左侍郎[36]（翰林院侍読学士[37]を兼任）を担当し[38]、1年後は礼部尚書[39]（翰林院学士[40]を兼任）に昇進した[41]。1631年、徐光啓は4月と7月に科挙試験の殿試の試験官と翰林院庶吉士試験の試験官を担当し[42]、10月に資善大夫（名誉のみの称号）に叙せられた[43]。さらに1632年、徐は東閣大学士[44]（礼部尚書を兼任）として内閣に入り[45]、1633年には太子太保[46]と文淵閣大学士[47]（礼部尚書を兼任）に昇進し[48]、同年11月に病死するまで朝廷に出仕し、崇禎帝に仕えていた。徐光啓は崇禎帝の在位期間には高位の官職（例えば、正三品の礼部左侍郎、正二品の礼部尚書）に任ぜられ、内閣にも加えられたため、高い政治的地位を得ていたことがわかる。政治的地位の向上によって、この時期の徐光啓は大量の上奏書を作成し、中国北東部の満州人の侵略に対抗する国防強化や、欽天監による日食の発生時刻推計の誤りを正すための暦法修正を、崇禎帝に提案した。そのため、万暦帝、泰昌帝、天啓帝の在位期間とは異なり、徐光啓は1628年から1633年までの5年間に、崇禎帝との間に密接な関係を継続していたと言える。

4. 徐光啓の政治的参与

上述の徐光啓と万暦帝、泰昌帝、天啓帝、崇禎帝の交わりの考察を通して、彼はこの4人の皇帝の在位期間において、上奏書による献言や職務遂行によって、皇帝との交わりを続け、万暦帝、泰昌帝、天啓帝、崇禎帝と、密度の濃淡はあったが君臣関係を維持していった。本章では、徐光啓と皇帝の交わりに基づいた徐本人の政治的参与を、(1) 宗教（キリスト教の弁護）、(2) 軍事学（明朝末期の軍事）、および (3) 天文学（暦法の修正）の側面から考察していく。

4-1. 宗教（キリスト教の弁護）

徐光啓がキリスト教を弁護し、宗教面で政治に参加していたのは、彼と万暦帝の交わりに見られる。

1616年、南京の礼部で侍郎を担当していた沈権は、南京にいるイエズス会宣教師と中国人キリスト者を捕まえ、教会堂を封鎖した[49]。そして、同年5月、8月と12月、沈は3つの上奏書（『参遠夷疏』、『再参遠夷疏』、『参遠夷三疏』）を万暦帝に提出し、中国に滞在していたイエズス会宣教師を厳しく批判した[50]。これらの上奏書では、宣教師は無知な民衆を騙し、改宗した者に金銭を与え、キリスト者の家族情報と生年月日を記録し、呪文を唱え、教会堂で民衆を集めて定期的な礼拝を行うのみならず、多くの知識人との交友関係を作って勢力を広げ、謀反を企む者であると批判されている[51]。加えて沈権は、キリスト教は祖先ではなく神を敬うことを教えており、祖先を祀ることや孝行を重視する儒教の学説に反すると断じ、宣教師がもたらしたキリスト教は儒教の倫理観とは相容れないものであると訴えている[52]。沈は、宣教師を明朝の帝権や儒教に基づく社会秩序と文化を破壊する者として批判し、彼らを処罰することを皇帝に請願したのである[53]。この事件は南京教案と呼ばれ、当時の中国におけるキリスト教の展開に打撃を与えた出来事となった。そして、沈権の上奏書によって、明朝末期の一部の知識人は儒教と帝権を擁護するため、キリスト教を「反儒教的・反社会的」と定義し、これに明確な敵意を示すようになったのである。

一方、徐光啓はキリスト者として、南京教案に際して万暦帝に上奏書『辨学章疏』を提出し、沈権の見方に反駁した。まず、徐はキリスト教の基本的な教義を説明し、キリスト教は神への奉仕による魂の救い、忠孝と慈愛、悔い改め、および善人への報い（天国に昇る）と悪人への報い（地獄に堕ちる）を教えるものであり、その戒律は人間の倫理にふさわしく、人を善に導いて悪を排除せしむることを主張した[54]。そして、キリスト教の教義は神が人間を創造し、善悪を賞罰することも教えるため、人間はキリスト教信仰を通して、創造主と裁定者としての神を心から愛して敬うようになるというのが、徐の見方でもある[55]。そこで、徐光啓はキリスト教が全人類を救って正義を行い、善良なキリスト教徒を育てる正当な宗教であることを訴えた。次に、徐はキリスト教の社会的機能を説明するため、キリスト教を信仰しているヨーロッパ諸国の社会秩序は良好で、住民は他人の忘れ物を奪うことはなく、夜でも家の扉は施錠されなく、キリスト教信仰を守り、神に逆らって罰されるのを畏れているということを書き[56]、キリスト教が国家の治安と社会秩序を保ち、社会問題を改善してモラルを高められる宗教であるとも主張した（徐本人がヨーロッパに行ったことはないため、ヨーロッパ諸国の状況を論じる言葉は誇張が含まれている）。最後に、徐はイエズス会宣教師を弁護し、彼らの才能と人柄を高く評判し、宣教師たちはみなキリスト教をしっかり守り、教養と学識、および良い人柄を持つ賢人であり、ヨーロッパの国々においても優れた英傑でもあると主張した[57]。

このように、徐光啓はキリスト教の教義面と社会面での役割の説明、および宣教師

の弁護を通して、キリスト教の正当性を万暦帝に示した。そのほか、徐光啓の『辨学章疏』の主要な内容を見ると、明朝末期の中国人キリスト者がキリスト教に対して熱意を示したのみならず、キリスト教の教義への的確な認識を持ち、社会面でもキリスト教を認め、宣教師への信頼と好意を表していたことが明らかになった。

4-2. 軍事学（明朝末期の軍事）

万暦帝、泰昌帝、天啓帝、崇禎帝と交わりながら、徐光啓は明朝末期の軍事に関心を持ち、皇帝に対して多くの上奏書を作成した。彼は皇帝に重用されて軍事に関する職務に就いた経験があり、軍事面からも政治に参与していたので、上記の4人の皇帝との交わりには軍事的な側面も貫かれていた。

例えば、万暦帝への上奏書『敷陳末議以殄凶酋疏』において、徐光啓は優秀な兵士を選出し、充実した訓練を行う必要性を強調し[58]、勇敢で才能のある者を募集し、優れた将軍に募集した兵士を訓練させ、武器や防具を兵士に配って戦争の技術を教え、賞罰制度を実施するという兵士調練の方法を提案した[59]。また徐は上奏書『遼左阽危已甚疏』の中で、明朝が満州人との戦争で不利な立場にあった状況に対して、軍事的才能のある人材を任命し、実用性のある兵器、防具、火器を作り、優秀な兵士を選んで訓練し、都市防塁を建設して強化し、明朝の使臣を朝鮮に派遣し、朝鮮を守ると同時に朝鮮と連合して満州人に対抗することを主張しながら、自分が使臣として朝鮮に赴くことを請願し、優秀な軍事的才能と愛国心を示した[60]。そこで、万暦帝は徐光啓が朝鮮に遣われるには適さないと考えたが、彼の軍事的才能を認め、兵士訓練と都市防衛の仕事を徐に与えたため、徐は軍隊訓練の人材として重用され、詹事府少詹事と河南道監察御史に昇進した[61]。さらに、通州と昌平の滞在中に、徐光啓は上奏書『統馭事宜疏』を書き、火器や戦争の技術を習得した兵士が育成したという訓練の成果を泰昌帝に報告した[62]。そのほか、天啓帝が即位した後、徐光啓は上奏書『台銃事宜疏』の中で、城を守る砲台の製造を論じた。すなわち砲台を造る時は、要塞化された都市から始め、次は首都に築造すべきである。そして、大きな城には6つの砲台を造り、小さな城にはそれぞれの状況に応じて砲台を造る。また、砲台を造る時に必要な材料、工具、職人および金銭は、城の状況によって異なるが、経費と人員を惜しまず、強くて丈夫な砲台を造るべきであるというのが徐の提案であった[63]。また、1629年に起こった満州人の侵略戦争に対して、崇禎帝は官員を集めて国防を協議し、徐光啓の提案を採用した[64]。これによって、徐は『守城条議』を著し、皇帝に北京防衛の計画を詳しく提案し、武術に優れ、火器や防具が造られ、北京防衛に対して良い提案のある平民を集めて北京防衛に参与させることを主張した[65]。さらに、彼は『計開目前至急事宜』と『続行事宜』において、都城防衛用の神威砲と大鳥銃、および戦陣用の中

銃の製造のみならず、優秀な兵士を選出して訓練し、鳥銃と武芸を習得させることなどを論じ、火器の用意と兵士調練による北京防衛の強化を主張した[66]。

これらの上奏書を見ると、徐光啓は兵士訓練や火器製造などの提案を通して、国防を強化して明朝を守る愛国思想を示しており、彼は政治上でも優れた愛国者、軍事家であったと言える。

4-3. 天文学（暦法の修正）

暦法の修正という天文学の側面からの政治への参与は、徐光啓と崇禎帝の交わりに見られる。

1629年6月21日の日食に対して、欽天監は日食が起きる時間を正確に算出できなかったため、崇禎帝は暦法の修正を考えた[67]。徐光啓は、同年9月に暦法修正の責任者として任命され、皇帝の勅命を受けて暦局[68]という暦法修正機関を開設した。徐は、天文学に精通している人材と職人を募集して暦法修正用の計器を作り[69]、西洋の暦法を参考にして従来の『大統暦』を修正し始めた[70]。徐は、暦法修正の進展と成果を上奏書で定期的に崇禎帝に報告し、皇帝からの支持を得た。例えば、『条議暦法修正歳差疏』の中で徐光啓は暦法修正の計画を、従来の暦法における誤りの是正、暦法修正の人材、暦法修正用の必要な計器、修正した暦法の応用という4つの部分に分けて挙げた[71]。『奉旨測候月食雲気隠蔽無憑測験疏』では、徐本人が崇禎五年陰暦7月14-15日の月食を測定した経緯を述べている[72]。また、『奉旨恭進暦書疏』、『奉旨続進暦書疏』と『奉旨恭進第三次暦書疏』は、暦法修正の3つの段階で編纂した暦書をまとめて皇帝に報告したものであり、合計24巻の暦書と暦表が1631年2月に献上され、合計20巻の暦書、暦表と図像が1631年8月に献上され、合計30巻の暦書と暦表が1632年5月に献上されたことが記載されている[73]。

崇禎帝が徐光啓を重用したことで、徐の天文学的才能は充分に発揮された。徐光啓は西洋の暦法を取り入れて、中国従来の暦法の修正を進めようとしている。徐光啓が、単にキリスト教を受容するだけではなく、同時に伝来した西洋知識も受容し、これを政治に応用しようとしていたことが明らかになった。

5. 明朝末期のキリスト教の展開への徐光啓の貢献

上述の徐光啓の政治的参与の考察を見ると、彼が皇帝との交わりの中で、キリスト教を守り、明朝末期の軍事に関する提案を出し、暦法を修正することを通して、積極的に政治に参与していたことがわかった。これに基づいて、本章では徐本人が政治的参与で明朝末期のキリスト教の発展に対して果たした貢献を、(1) キリスト教の新た

な認識の提供、(2) 西洋学問の導入、(3) イエズス会宣教師と中国人キリスト者の朝廷進出という3つの側面から論じる。

5-1. キリスト教の新たな認識の提供

前述の通り、南京教案に際して徐光啓は万暦帝への上奏書『辨学章疏』を通して、キリスト教を弁護した。こうした宗教面での政治的参与を見ると、徐は皇帝に対して護教者としての自らの立場を明らかにしたばかりでなく、明朝末期の中国人キリスト者に特有のキリスト教理解を表したと言える。

すなわち、徐は『辨学章疏』の中でキリスト教と儒教の共通点を指摘している。キリスト教の「神」と儒教の「天」は、天地を創造して万物を支配し、善悪に対して賞罰を与え、権威を持つ至高の存在である[74]。キリスト教における「神への奉仕」と儒教における「天への奉仕」は、「神」と「天」を創造主であり、かつ裁定者でもある存在として奉仕し、その威厳を敬い、至高の存在に基づく教義と学説を実践し、善に向かってモラルを向上するように努めることである[75]。そこで徐光啓は、キリスト教と儒教の類似性という視点から、キリスト教は、儒教と同様に道徳を高めて至高の存在に奉仕するのを重要視する「儒教らしい」宗教であると主張し、宣教師がキリスト教と儒教の類似性を確認するため中国に来、人々を善に向かわせ、神の愛と福音を広げるように力を尽くしたと訴えた[76]。さらに、彼はキリスト教と儒教の共通点を踏まえ、その両者の結合による社会改善の試みを提起した。キリスト教と儒教はいずれも至高の存在を通じて道徳の向上に役立つ宗教なので、その両者を結びつけると、民衆の教化や善悪の賞罰などの社会的問題が解決されるのみならず、社会秩序や帝権の安定にも貢献できる[77]。そこで、徐光啓はキリスト教が儒教とともに明朝の社会全体を改善することができるという視点から、再度キリスト教の社会的役割を認めたのである。

5-2. 西洋学問の導入

政治的参与においては、徐光啓は西洋の軍事学と天文学を中国に導入して政治に応用する提案を、皇帝への上奏書に書いていた。これらのことは、彼が西洋学問の導入に力を尽くしたことを示しているが、こうした西洋学問の導入はイエズス会の適応政策に関係したものであった。

マテオ・リッチらのイエズス会宣教師が中国に到来した後は、中国文化を尊重する適応政策を採用して布教が進められた。すなわち、宣教師は宣教を展開するため、まずは中国語、書道、中国の風俗と礼儀などを勉強した[78]。宣教師たちは、明朝末期の社会における儒教と士大夫（知識人）の高い地位を十分に認識し、知識人からの賛同

が得られるように適応政策を採り、儒服を着用して儒教の経典を学びながら、知識人と交わって彼らの尊重と支援を得ていった[79]。そのほか、中国人からの反感を招くことを避けるため、宣教師はキリスト教を直接に宣伝することをせず、中国人（特に知識人）の好奇心を利用して、ヨーロッパからの物品、世界地図や西洋の書籍などを紹介するなど、彼らの好感を得て宣教を進めるように努力した[80]。

このように、適応政策によって自然科学などの西洋学問はキリスト教とともに中国に伝来したので、徐光啓はキリスト教のみならず、数学、物理学、軍事学、天文学などを受け入れ、明朝末期の社会全体にこれらを応用しようとした[81]。特に、政治的参与の中で、徐光啓は軍事学や天文学に関する知識を導入していった。例えば、彼は上奏書『謹申一得以保万全疏』において、西洋鉄砲の購入と製造の計画を天啓帝に提案した[82]。そのほか、徐は崇禎帝の治世中に暦法修正の責任者となったため、黄道と赤道の座標、地球の経度と緯度、24時制、および望遠鏡などの西洋の天文学の成果を利用して暦法を修正しながら[83]、天文学の理論や天文学に関連する数学の知識などを中国語に訳し、天文学の基本的理論と球面天文学の原理、天文学相関のデータ、天文学に使われる数学の知識、天文計器、西洋の暦法と中国の暦法の結合に分類して暦書に収録していった[84]。これらの徐光啓の努力は、中国に西洋学問を紹介したに留まらず、それらの知見を政治に応用させるに至らしめ、このことはイエズス会の適応政策の中国における継続に貢献するものとなっていった。

5-3. イエズス会宣教師と中国人キリスト者の朝廷進出

その他の徐光啓の政治的参与として、上述の西洋学問の導入を進めるために、上奏書で皇帝に宣教師とキリスト教に改宗した知識人を推薦したことが挙げられる。

例えば、暦法修正を推進するように、徐は『条議暦法修正歳差疏』と『修改暦法請訪用湯若望羅雅谷疏』の中で、イエズス会宣教師ニコロー・ロンゴバルド（1559–1654）、ヨハン・テレンズ（1576–1630）、ヨハン・アダム・シャール・フォン・ベル（1591–1666）、およびジャコモ・ロー（1592–1638）を崇禎帝に推薦した[85]。そこで、この4人の宣教師が暦局に入って暦法修正の仕事に参加し、天文計器の製造や中国語暦書の編纂に力を尽くした。例えば、ロンゴバルドとテレンズは天球地球儀、日時計、時計と望遠鏡などの製造を監督し、『測天約説』（2巻）や『通率立成表』（1巻）などの中国語暦書と暦表を編纂した。そして、ヨハン・アダルは『交食暦指』（4巻）と『交食暦表』（2巻）を作成し、ローは『月離暦指』（4巻）と『月離暦表』（6巻）を作った[86]。また、暦法修正が自分の死後も続くように、徐光啓は『暦法修正告成書器繕治有待請以李天経任暦局疏』を通して、山東参政（山東地域の民政事務を管理する官職。品位は従三品）を担当していたキリスト者の李天経（1579–1659）が自分の仕

事を引き継ぐよう、暦法修正の責任者として崇禎帝に薦めた[87]。李天経は徐の死後に暦局の責任者となり、徐が残した原稿を整理して暦法修正を続行し、1635年には『崇禎暦書』を作成した[88]。そのほか、『欽奉明旨敷陳愚見疏』において、徐光啓は西洋の軍事技術に精通した中国人キリスト者の孫元化（1581-1632）と王徴（1571-1644）を崇禎帝に推薦した[89]。そこで、孫元化は登莱巡撫（山東東部の登州と莱州地域の行政、軍事と司法を管理する官職。品位は従二品）に任命され、王徴は山東按察司僉事（山東地域の司法と監察を司る官職。品位は正五品）に授けられ、彼らは皇帝に起用された後登州に赴き、西洋火器を備える軍隊を訓練した[90]。

このように、宣教師と中国人キリスト者が明朝末期の朝廷に登用され、軍隊訓練や暦法修正などの事務に参与するようになったことは、徐光啓の中国におけるキリスト教の勢力拡大への貢献につながるものであった。特に、イエズス会宣教師が徐の推薦によって朝廷に登用されたことは、彼らの中国滞在と布教の続行を可能としていった。例えば、ヨハン・アダムは徐光啓と協力して暦法修正に力を尽くしながら、宮廷内部の布教を展開し、1630年には10人の官吏に洗礼を授け[91]、1年後は始めて宮廷でミサを行った[92]。彼の努力によって、宮廷内部のキリスト者が増え、1640年までに50人程度の女性貴族、50人程度の宦官、140人程度の皇族成員が改宗した[93]。このように、徐光啓の政治的参与を通して朝廷に進出していた宣教師が宣教範囲を宮廷に広げたことは、徐本人の間接的な中国におけるイエズス会の宣教活動の展開と拡大への貢献と言えるものである。

6. おわりに

本稿は、徐光啓と万暦帝、泰昌帝、天啓帝、崇禎帝の交わりを中心にし、彼の政治への参与を考察し、さらに明朝末期のキリスト教の展開への貢献を考察してきた。

まず、上奏書の提出や官職任命などを通して、徐と上記の4人の皇帝の君臣関係が成立した。次に、皇帝との交わりにおいて徐光啓が、上奏書でキリスト教を弁護し、明朝末期の軍事的職務を担当し、皇帝の勅令により暦法修正を行うことにより、宗教、軍事学、天文学的側面から政治に参与していったことが明らかになった。最後に、徐光啓は数十年の官途の中で、上奏書でキリスト教への新たな見方を皇帝に示し、イエズス会の適応政策の一環としての西洋学問の導入を朝廷に実践し、宣教師と他のキリスト者を皇帝に推薦している。そこでは、徐光啓はキリスト教と儒教の共通点を指摘して新しいキリスト教理解を提示し、西洋の知識を中国に導入して応用させ、イエズス会宣教師と中国人キリスト者の皇帝への仕官の道を開いた。これによって、徐は政治的参与を通して、明朝末期のキリスト教思想の発展、適応政策の続行、

およびキリスト教の拡大に貢献したと言える。

＊本稿は、日本基督教学会第71回学術大会（2023年9月6-7日、於上智大学）での研究発表に加筆・修正したものである。

注

1　徐光啓は1603年1月15日に南京で洗礼を受けて改宗した。（方豪、『中国天主教史人物伝』、宗教文化出版社、2007年、73頁。）

2　徐光啓によって書かれた上奏書は、各種の徐光啓文集（徐の文章、詩、手紙などを収録したもの）に含まれている。本研究は1963年の『徐光啓集』（王重民編、中華書局出版）に収録されている徐の上奏書を参考する。

3　徐驥（明）、『文定公行実』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、552–559頁。

4　査継佐（清）、『罪惟録』、浙江古籍出版社、1986年、1778–1782頁；張廷玉等（清）、『明史』、中華書局、1974年、6493–6495頁。

5　羅光、『徐光啓伝』、学生書局、1969年、21–196頁。

6　王重民、『徐光啓』、上海人民出版社、1981年、27–142頁。

7　徐允希（清）、李杕（清）、『徐文定公年譜』、『北京図書館蔵珍本年譜叢刊（第55冊）』、北京図書館編、北京図書館出版社、1999年、53–57頁。

8　徐光啓の官途に関する記載が『徐光啓年譜』の「本譜之部」に書かれている。（梁家勉、『徐光啓年譜』、上海古籍出版社、1981年、33–206頁。）

9　賈雪飛、『明中後期的上海士人與地方社会 ── 徐光啓的成長大舞台』、復旦大学、2012年、64–112頁。

10　史習隽、「徐光啓の親族関係と上海地域における天主教受容」、『東洋学報』第97巻第3号、東洋文庫、2015年、36–44頁。

11　張中鵬、湯開建、「徐光啓與利瑪竇之交遊及影響」、『華南師範大学学報：社会科学版』2011年第5期、華南師範大学、2011年、71–74頁。

12　史習隽、「明末江南士大夫の天主教受容について ── 徐光啓の交友関係を中心として ──」、『九州大学東洋史論集』第42巻、九州大学文学部東洋史研究会、2014年、122–134頁；史習隽、「徐光啓的官界人際網絡與在華耶穌会士伝教事業的展開」、『史林』2017年第5期、上海社会科学院歴史研究所、2017年、73–82頁。

13　徐宗沢、『中国天主教伝教史概論』、上海書店、1989年、305–308、332–333頁。

14　史習隽、『信仰的力量 ── 従徐光啓的交友及家族網絡看其宗教信仰』、南京大学、2010年、54–60頁。

15　孫政清、「徐光啓・科学・天主教（続）」、『中国天主教』1986年17期、中国天主教愛国会、1986年、22–23頁。

16　伍玉西、『明清之際天主教書籍伝教研究（1552-1773）』、四川大学、2009年、181–202頁。

17　『明清歴科進士題名碑録』により、徐光啓は1604年の会試（万暦三十二年甲辰科）に合格し、進士（第三甲）を取得した。（王際華（清）、蔣元益（清）、李周望（清）、『明清歴科進士題名碑録』、華文書局、1969年、1111頁。）

18　顧衛民、『中国天主教編年史』、上海書店出版社、2003年、101頁；談遷（明）、『国榷』、中華書局、1958年、4928頁。

19　鄒漪（清）、『啓禎野乗』、明文書局、1991年、232頁；梁、『徐光啓年譜』、77–79、85頁；徐光啓（明）、『漕河議』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、19–36頁。
20　梁、『徐光啓年譜』、81–85頁。
21　談、『国権』、4970頁。
22　蕭若瑟、『天主教伝行中国考』、上海書店、1989年、149–150頁；梁、『徐光啓年譜』、89頁。
23　葉向高等（明）、『明神宗実録』、中央研究院歴史語言研究所、1962年、8999–9000頁；梁、『徐光啓年譜』、95頁。
24　王、『徐光啓』、63–64頁；徐、『文定公行実』、553頁；葉、『明神宗実録』、9083頁。
25　1616年7月に再び翰林院検討に復職した後、徐光啓が皇太子の教育を任されたことがある。その後、徐は1617年2月に詹事府左春坊左賛善（皇太子を補佐しながら文書編纂を担当する低級官職。品位は従六品。一方、この頃徐本人は翰林院検討を兼任していた）に昇進し（約8ヶ月後に病気で休暇をとり、1618年6月に復職した）、同年7月に寧夏に派遣されて慶王の叙任式を行い、1619年4月に科挙試験の殿試の試験官を担当した。（徐光啓（明）、『家書十』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、491頁；梁、『徐光啓年譜』、116、117、119、122頁。）
26　呉戈、「南京教案與福建教案対明代天主教伝教行動的影響」、『学海』2016年第1期、江蘇省社会科学院、2016年、195頁；張力、劉鑑唐、『中国教案史』、四川省社会科学院出版社、1987年、41–42頁。
27　顧、『中国天主教編年史』、123頁。
28　梁、『徐光啓年譜』、124、130頁。
29　梁、『徐光啓年譜』、136、142頁。
30　1613年の科挙試験の会試の試験官を担当していた間、徐光啓が同行の試験官の魏広微（1570-1627）（魏はのちに閹党に入った）と対立したが、これは徐と閹党の対立の始まりと言える。天啓帝の治世に至り、魏広微は徐光啓を閹党に引き込むため、1624年に徐を礼部右侍郎（翰林院侍読学士を兼任）および神宗実録の編纂者に任命しようとしたが、徐光啓は閹党を憎んでいたため、ついに就任しなかった。これによって、閹党に所属する御史の智鋌（16世紀頃－1649）が徐を厳しく弾劾し、徐光啓と閹党の対立が深くなった。（査、『罪惟録』、1779頁；梁、『徐光啓年譜』、150、154頁。）
31　談、『国権』、5304頁；梁、『徐光啓年譜』、154頁。
32　梁、『徐光啓年譜』、157頁。
33　王、『徐光啓』、113頁；梁、『徐光啓年譜』、158頁。
34　徐、『文定公行実』、555頁；梁、『徐光啓年譜』、159頁。
35　徐、『文定公行実』、555頁。
36　北京六部の礼部の次官で、礼儀や教育などを司る官職。品位は正三品。
37　文書や勅令などの編纂と校正を担当する官職。品位は従五品。
38　談、『国権』、5476頁。
39　北京六部の礼部の長官で、礼儀や教育などを司る官職。品位は正二品。
40　文書や勅令などの編纂と校正を担当する官職。品位は正五品。
41　徐、『文定公行実』、558頁。
42　徐、『文定公行実』、558頁。
43　梁、『徐光啓年譜』、187頁。
44　詔書の起草などを担当し、皇帝の顧問に相当する官職。品位は正五品。
45　徐、『文定公行実』、558頁。
46　名誉のみの称号。

47　詔書の起草などを担当し、皇帝の顧問に相当する官職。品位は正五品。

48　徐、『文定公行実』、558–559頁。

49　周志斌、「晩明南京教案探因」、『学海』2004年第2期、江蘇省社会科学院、2004年、103–105頁。

50　鍾鳴旦、孫尚揚、『1840年前的中国基督教』、学苑出版社、2004年、258頁。

51　「…（前略）…起蓋無樑殿，懸設胡像，誑誘愚民。從其教者，每人與銀三兩，盡寫其家人口生年日月，云有咒術，後有呼召，不約而至，此則民間歌謠遍傳者也。每月自朔望外，又有房虚星昴四日為會期，每會少則五十人，多則二百人，此其自刻天主教解要略中，明開會期可查也。蹤跡如此，若使士大夫峻絶，不與往還，猶未足為深慮。然而二十年來，潛往既久，結交亦廣，不知起自何人何日，今且習以為故，嘗玩細娛而忘遠略，比比是矣。臣若更不覺察，胡奴接踵於城闉，虎翼養成而莫問，一朝竊發，患豈及圖？」（沈榷（明）、『再参遠夷疏』、『聖朝破邪集』、夏瑰琦編、建道神学院、1996年、63–64頁。）

52　「臣又問其誑惑小民，輒曰：「祖宗不必祭祀，但尊奉天主，可以昇天堂，免地域。」夫天堂地獄之説，釋道二氏皆有之，然以之勸人孝弟，而示懲夫不孝不第造悪業者，故亦亦有助于儒術爾。今彼直勸人不祭祀祖先，是教之不孝也。」（沈榷（明）、『参遠夷疏』、『聖朝破邪集』、夏瑰琦編、建道神学院、1996年、61頁。）

53　「奏為遠夷闌入都門，暗傷王化，懇乞聖明申嚴律令，以正人心，以維風俗事。」（沈、『参遠夷疏』、58頁。）

54　「其説以昭事上帝為宗本，以保救身靈為切要，以忠孝慈愛為工夫，以遷善改過為入門，以懺悔滌雛為進修，以升天真福為作善之榮賞，以地獄永殃為作悪之苦報，一切戒訓規條，悉皆天理人情之至。」（徐光啓（明）、『辨学章疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、432頁。）

55　「其法能令人為善必真，去悪必盡，蓋所言上主生育拯救之恩，賞善罰悪之理，明白真切，足以聳動人心，使其愛信畏懼，發於繇衷故也。」（徐、『辨学章疏』、432頁。）

56　「蓋彼西洋鄰近三十餘國奉行此教，千數百年以至於今，大小相卹，上下相安，路不拾遺，夜不閉關，其久安長治如此。然猶舉國之人，兢兢業業，唯恐失墜，獲罪於上主。則其法實能使人為善，亦既彰明較著矣。」（徐、『辨学章疏』、432–433頁。）

57　「然臣累年以來，因與講究考求，知此諸臣最真最確，不止踪跡心事一無可疑，實皆聖賢之徒也。且其道甚正，其守甚嚴，其學甚博，其識甚精，其心甚真，其見甚定，在彼國中亦皆千人之英，萬人之傑。」（徐、『辨学章疏』、431頁。）

58　「臣之愚慮，以為戡定戰亂，不免用兵，用兵之要，全在選練。此人人所知，別無奇法。但選須實選，練須實練。」（徐光啓（明）、『敷陳末議以殄凶酋疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、98頁。）

59　「精求天下勇力捷技奇材異能之士，豐其晌給，厚其拊循，優其作養。又精求良將以統率之，選用教師，羣居聚處，日夜肄習之。又博求巧工利器，如車乗甲冑軍火器械等，盡法製造以配給之。技藝既精，然後教之形名節制、步伐止齊、分合進退之法。中間激以重賞，董以重罰，教練既成，將臂指相使，雖赴湯蹈火，無不如意。」（徐、『敷陳末議以殄凶酋疏』、99頁。）

60　徐光啓（明）、『遼左阽危已甚疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、107–115頁。

61　徐光啓（明）、『恭承新命謹陳急切事宜疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、117–118頁。

62　「自二月領敕受事，迄今半載，勉收驅馳，殫力簡練，博求謀勇參佐技藝材官，將三營民兵選取強壯，因材授器。凡軍火技擊，以次服習，積久之後，漸近精熟。此頒營陣規式，使知分合進退，奇正攻守。」

（徐光啓（明）、『統馭事宜疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、148頁。）

63 「…（前略）…今之造臺自重城始，次及都城。若最大者宜造六座，體製狹小，即數目加添。大約除城磚見有外，所需黑磚、大石、灰沙等材料，搬運車脚、匠役工食等銀兩，所需亦鉅。但此事所關久遠重大，不宜節省，只求核實，無分毫冒破，便得金湯之固，千載如新矣。」（徐光啓（明）、『台銃事宜疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、189頁。）

64 崇禎帝が官員とともに国防を議論する過程、および徐光啓の具体的な見方は、『徐光啓集』に収録された『記崇禎二年十一月初四日平台召対事』と『記崇禎二年十一月二十八日平台召対事』に書かれている。（王、『徐光啓』、113–114頁；徐光啓（明）、『記崇禎二年十一月初四日平台召対事』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、269–271頁；徐光啓（明）、『記崇禎二年十一月二十八日平台召対事』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、271–272頁；梁、『徐光啓年譜』、166–167頁。）

65 「城中智勇奇士，殊不乏人，皆宜收錄為用。或勇力絶倫，或武藝出衆，或火器合法，或工巧能造守具，聽京官自行保任，於兵部堂上官處試驗…（中略）…各城各區不拘尊卑，有特出意見者，每日辰未二時，各遣知事官役，到東朝房議定。如可行者，通行知會遵守。」（徐光啓（明）、『守城条議』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、273、275頁。）

66 「凡守城除城威大砲外，必再造中等神威砲及一號二號大鳥銃，方能及遠命中。至戰陣中，大砲決不可用，尤須中銃及大號鳥銃…（中略）…此未能一時取盈，旦須作速製造，成一器便得一益也。」「戰兵必須精選勁卒萬人，副以力兵萬人，分為五營，盡法訓練。最近亦須二月乃成。其人即於援兵步營中挑選，寧少無濫，漸次取盈。器甲等以漸備具。目下只須先習大小鳥銃及本來武藝，候軍需完日，藝亦垂成。」（徐光啓（明）、『計開目前至急事宜』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、276頁；徐光啓（明）、『続行事宜』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、277頁。）

67 梁、『徐光啓年譜』、163頁。

68 『礼部為奉旨修改暦法開列事宜乞裁疏』によれば、徐光啓は北京の宣武門の付近にあった、首善書院という空いた建物を暦法修正の拠点（暦局）とした。（徐光啓（明）、『礼部為奉旨修改暦法開列事宜乞裁疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、328頁。）

69 徐光啓（明）、『奉旨修改暦法開列事宜乞裁疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、339頁。

70 王、『徐光啓』、118頁。

71 徐光啓（明）、『条議暦法修正歳差疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、333–338頁。

72 徐光啓（明）、『奉旨測候月食雲気隠蔽無憑測験疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、410頁。

73 徐光啓（明）、『奉旨恭進暦書疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、372頁；徐光啓（明）、『奉旨続進暦書疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、386頁；徐光啓（明）、『奉旨恭進第三次暦書疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、404頁；梁、『徐光啓年譜』、184、186、192–193頁。

74 喬飛、「作為儒家法律思想基礎的「天」」、『河南財経政法大学学報』2022年第3期、河南財経政法大学、2022年、152–153頁。

75 肖清和、「「一天各表」：儒家宗教性與儒耶対話」、『北京行政学院学報』2020年第5期、北京行政学院、2020年、119–120頁。

76 「所以數萬里東來者，蓋彼國教人，皆務修身以事上主，聞中國聖賢之教，亦皆修身事天，理相符合，是以辛苦艱難，履危蹈險，來相印證，欲使人人為善，以稱上天愛人之意。」（徐、『辨学章疏』、431–432頁。）

77 「…（前略）…則諸陪臣所傳事天之學，真可以補益王化，左右儒術…（後略）…」（徐、『辨学章疏』、432頁。）

78 李広蘭、『明末三朝対伝教士政策的演変研究』、山東大学、2006年、26頁。

79 鍾、孫、『1840年前的中国基督教』、113–115頁。

80 徐、『中国天主教伝教史概論』、178頁；孟凡勝、『明末清初天主教在中国的伝教史研究』、山東大学、2009年、30–31頁。

81 徐光啓およびキリスト教に転じた他の知識人たちは、中国に輸入されたキリスト教と西洋学問を「天学」と呼んでいた。例えば、徐は『刻幾何原本序』において「天学」をこうして説明した。「顧惟先生之學，略有三種：大者修身事天，小者格物窮理；物理之一端別為象數，一一皆精實典要，洞無可疑，共分解擘析，亦能使人無疑。」彼にとって、天学は同時に個人的なモラルの向上や神への奉仕を重視するキリスト教、および事物の原理の探究を重視する科学を含んでいた。（徐光啓（明）、『刻幾何原本序』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、75頁。）

82 徐光啓（明）、『謹申一得以保万全疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、175頁。

83 何妙福、薛道遠、「徐光啓的天文学研究方法」、『徐光啓研究論文集』、席沢宗、呉德鐸主編、学林出版社、1986年、74頁。

84 王、『徐光啓』、120–121頁；徐光啓（明）、『曆書総目表』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、375–376頁。

85 徐、『条議曆法修正歳差疏』、335頁；徐光啓（明）、『修改曆法請訪用湯若望羅雅谷疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、344頁。

86 徐光啓（明）、『修曆因事暫輟略陳事緒疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、347–348頁；徐、『奉旨恭進第三次曆書疏』、404頁；方、『中国天主教史人物伝』、157–158頁。

87 徐光啓（明）、『曆法修正告成書器繕治有待請以李天経任曆局疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、425頁。

88 王、『徐光啓』、123–124頁；方、『中国天主教史人物伝』、243頁。

89 徐光啓（明）、『欽奉明旨敷陳愚見疏』、『徐光啓集』、徐光啓（明）、王重民編、中華書局、1963年、313頁。

90 方、『中国天主教史人物伝』、162、166頁。

91 徐、『中国天主教伝教史概論』、202頁。

92 費賴之、『在華耶穌会士列伝及書目』、馮承鈞訳、中華書局、1995年、170頁。

93 方、『中国天主教史人物伝』、231頁。